

精巧な技能を備えた弥生人の存在

～荒尾南遺跡出土の木製品から～

調査課 山本厚美

考古学コラム「きずな」No.1

平成24年7月1日

岐阜県文化財保護センター

～集落を作って定住し、稲作を中心とした農耕を行っていた。時には収穫したコメをめぐって争いが生じることもあり、人々の間には階層意識が芽生え始めた。大陸や他地域との間で文化や物資の交流が活発になり、徐々に生活の質が向上していった。～

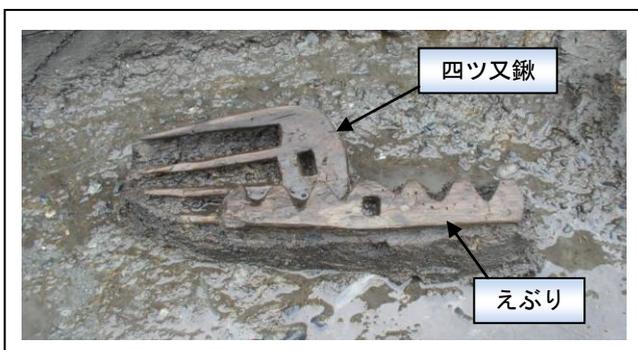
多くの人々が「弥生時代」とか「弥生人」に対してもつイメージは、こんなところでしょうか…。実際に小学校や中学校の教科書にある弥生時代の想像図からは、こんな弥生人の姿をイメージすることができます。

岐阜県大垣市の西部、JR 東海道線と国道 21 号線が立体交差する一帯では、東海環状自動車道大垣西インターチェンジの建設が進められています。この事業に伴って当センターでは、「荒尾南遺跡」の発掘調査を行いました(H18～H23)。この6年間にわたる発掘調査では、土器、石器、金属製品、木製品など、膨大な量の遺物が出土しました。

今回は、この膨大な出土遺物の中から「木製品」に注目したいと思います。「木製品」とは文字通り、木材を加工して作られたものであり、その種類、用途は下記の通り多岐にわたります。

農具 工具 紡織具 容器 家具 武具
祭祀具 土木・作業用具 食事具 発火具
漁撈具 建築部材 杭 など

木造家屋の柱、お椀、机や椅子、草刈り鎌や鍬の柄など、これらの多くが現代の私たちの生活においても生かされていることが分かりますね。



写真の「えぶり」と「四ツ又鍬」は、平成20年度荒尾南遺跡調査で、「大溝」から出土した農具です。弥生時代後期に堆積したと考えられる土層から出土しました。「大溝」からは他にも多くの木製品が出土し、この2つの木製品の近くからは、平鍬、鋤、田下駄などといった木製品が、遺存状態よく出土しました。

個別の写真を見てみると、田畑での農作業において使われている農具と比較しても、形状が似ていることが分かりますね。「四ツ又鍬」は耕作地をおこすための道具であり、「えぶり」は耕作地の凹凸を平坦にならすための道

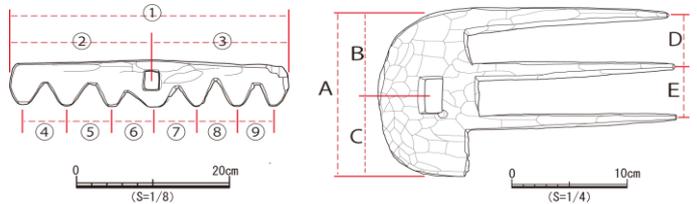
具です。当時は木製、現代は金属製であることの違いがあるだけで、2000年近くの時間差を経ても用途や形状はほぼ変わっていません。



↑「えぶり」

↓「四ツ又鍬」

2点の木製品をよく調べてみると、当時、荒尾南遺跡で生活していた弥生人が、実に精巧な木製品の製作技能を備えていたことが分かります。各部分の間隔を下の図のように設定し、それぞれの長さを計測してみました。



2つとも、長方形の「柄穴(えあな)」があげられていますが、その位置に着目すると、「えぶり」の①が35.8 cmであるのに対して②が18.0 cm、③が17.8 cmでした。また「四ツ又鍬」のAが14.8 cmであるのに対してBが7.5 cm、Cが7.3 cmです。どちらも道具とも、「柄穴」がほぼ正確に中心に配置されていることが分かります。

また、「えぶり」の突起の間隔を計測すると、④58、⑤60、⑥59、⑦58、⑧56、⑨55 mmとなり、数mm単位の誤差しかありません。また「四ツ又鍬」の突起の間隔についても、Dが50 mm、Eが49 mmとほぼ同じ値を示しました。欠損している4本目の突起についても、ほぼ同様の配置であったと考えられます。

以上の数値から、少なくともこの2点の木製農具は、重心のバランスがよく保たれ、各部のサイズが揃っていることが分かります。しかも、のこぎりのない時代に一木からこのような形状のものが作り出されているのですから、その技術力の高さ、製品の精巧さには驚くばかりです。

約2000年前、荒尾南遺跡には多くの竪穴住居が立ち並び、稲作を中心とした農耕を展開しながら、生き生きと生活する人々がいました。この遺跡の発掘調査に2年間携わった私は、発掘現場から約1.5 kmのところに住んでいます。この木製品を使っていた人々は、もしかしたら私の遠い遠いご先祖様なのかもしれません…。